

『誰しもが自分の中のエベレストを登っている』 栗城史多(登山家)

～世界最高峰エベレストに単独・無酸素登頂をめざす栗城史多氏の記事から

「マッキンリーを登頂してからは、とにかく無我夢中で世界の最高峰を登り続けました。ただ、その中で感じたのは、登山がいかにも孤独な世界であるかということでした。頂に立ったときの感動や山で得た学びを、帰国後、友人に伝えようとしても、全く理解してもらえなかったんです。だからよく登山は観客なきスポーツとか非生産的の行為と言われるんですが、やっぱりこの感動を多くの人と共有したい。どうにか伝えられる方法はないかなと思っていたときに、偶然、あるテレビ局から「インターネットの動画配信をやりませんか」というお話をいただいたんです。

2007年、世界第6位の高峰ヒマラヤのチョ・オユーを登るときでした。ただ一つ問題があって、番組のタイトルが「ニートのアルピニスト初めてのヒマラヤ」という名前だったんです。それで、日本全国のニートや引きこもりの方から、たくさんメッセージをいただきました。「お前には登れない」とか、中には「死んじゃえ」とかですね。そういう悪いメッセージばかり。

それでも1ヶ月以上かけて登っていきました。しかし、頂上付近で天気が悪くなってガスがかかってしまい、断念せざるを得なかったんです。それで一回5300メートル地点にあるベースキャンプまで下りていきました。するとまた、誹謗中傷の嵐です。

「ああ、やっぱりダメだった」「夢って叶わないんですね」と。

いったん8000メートルまで行くと、もの凄く身体が衰弱するんです。酸素が3分の1なので、気圧も3分の1になり、身体の水分がどんどん外に抜けてしまう。そのため脂肪だけでなく筋肉まで落ちて、全然力が入らなくなるんです。ただ、このまま終わるのはどうしても悔しかった。私は3日だけ休養を取り、再アタックしました。そして、5日間かけて頂上につくことができたんです。

すると、それを見ていた人達の言葉が180度変わりました。それもただ「栗城はすごい」とかではなく、「僕も本当は夢があって、諦めていたけど、もう一回やろうと思いました」とか「私も何か始めようと思いました」と。で、その

時に思ったんです。「ああ、自分だけが山に登っているんじゃない。皆それぞれ見えない山に登っているんだな」って。講演会をしていても、「この間の試験受かりました」「夢叶えました」と私のところに報告に来てくれる人が多いんです。

先日も、41歳でようやく教員試験に受かって、先生になれたという方が報告に来てくださったりしました。その人にとっては教員試験が見えない山であり、エベレストです。そして誰も自分の中のエベレストに登っているわけです。

もちろん中には挫折してしまった人もいるでしょうが、私はそういう人達も夢を共有して、「自分はできない」「無理だ」と思っている心の壁を取っ払いたい。見えない山に挑戦し、ともに成長していきたい。それが私の目指す登山なんです。」

【校長雑感】

何をやるにも、やる前から「できない」「無理だ」と言う人がいます。そういう人は、できない理由をあれこれ並べ立てるだけで、どうしたらできるようになるだろうといった建設的な考え方を持ち合わせません。

どうでしょう？つまらないと思いませんか？？

当然、初めてやることにはリスクはつきものです。しかし、そのリスクを恐れて何も手をつけないことが、より大きなリスクにつながるということも、現実社会ではあり得ることなのです。

やって失敗しても、失敗したという経験が得られます。そして、その経験が次の成功の糧になります。

なにもしなければ、そういう経験値も得られません。あるのは、やっぱりあの時やっていればよかったという後悔の念だけです。

さて、あなたは、どちらの道を選択しますか・・・？

「見えない山に挑戦し、ともに成長していきたい」

登山家栗城氏のこの言葉は、我々に勇気を与えてくれます。